

かざ

ぐるま

風車

紀州の歴史と文化の風

文化財センター季刊情報誌【かざぐるま】

2021 冬号

97

公益財団法人 和歌山県文化財センター

特集

田屋遺跡の発掘調査 （場を変え長く続いた集落）



調査地を北からのぞむ

特集 田屋遺跡の発掘調査 場を変え長く続いた集落

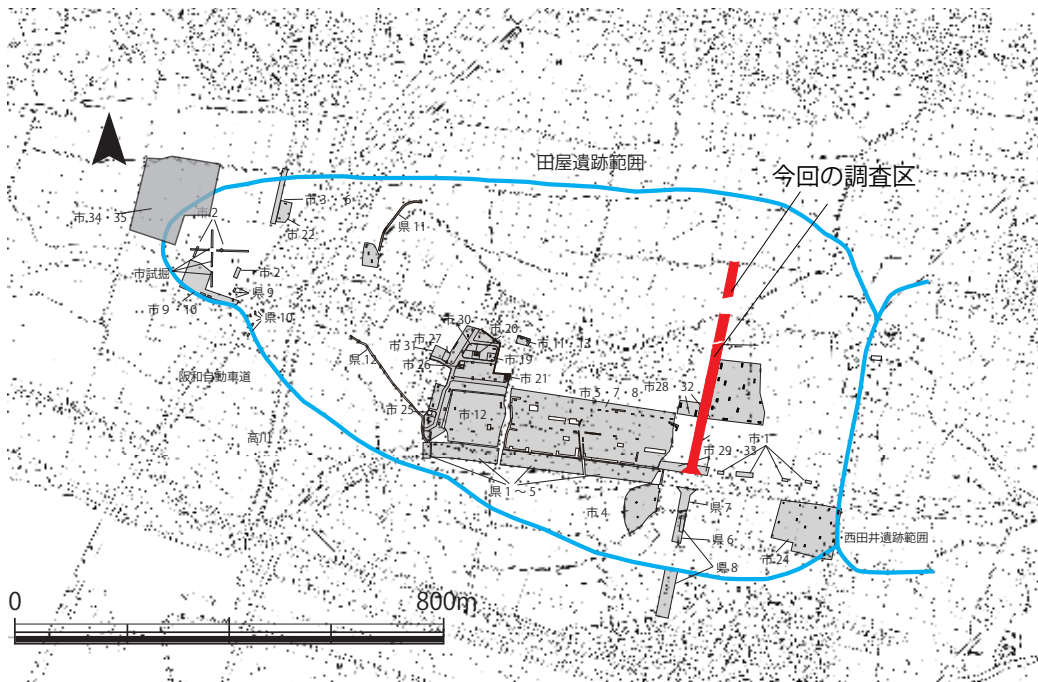


図1 過去の調査地
(公財)和歌山市文化スポーツ振興財団 2017『田屋遺跡 第18次発掘調査報告書』を改変)

田屋遺跡とその環境

田屋遺跡は、紀の川北岸の和歌山市直川・田屋・小豆島の広範囲に展開する弥生時代～中世の集落遺跡で、古墳時代に最盛期を迎えました。

田屋遺跡のある紀の川下流域は、縄文時代～近世の遺跡が多く分布します。弥生時代前期では、紀の川南岸に遺跡が多く分布していましたが、弥生時代中期以降になると紀の川北岸にも集落が広がるようになります。田屋遺跡もそうした集落の一つです。また、北岸には紀伊国府があったとされる府中遺跡が位置するほか、南海道が通っていたと推定されるなど、古代における紀伊国の主要施設が集められていました。

過去の調査

田屋遺跡は度々調査が行われており(図1)、遺跡内で多くの弥生時代

古墳時代の集落遺構が発見されています。とりわけ一般国道24号(和歌山バイパス)建設に伴う調査では13,000㎡以上にわたる調査区から、40棟以上の竪穴建物跡などが見つかりました。

今回の調査

今回の発掘調査は、紀伊停車場田井ノ瀬線道路改良事業(粉河加太線と和歌山バイパスをつなぐ南北の道路を作る工事)に先立って行われたものです。調査は平成27年から令和元年まで、4次にわけて行われました。『風車』では80号で第2次調査、88号で第3次調査と第4次調査を紹介しました。

また、出土遺物の整理を令和元年と2年に行い、調査成果をまとめた発掘調査報告書(『田屋遺跡～紀伊停車場田井ノ瀬線道路改良事業に伴う発掘調査～』)を令和2年に刊行しました。

そのため、今号では、こうして調査全体を通して分かったことについて紹介します。

今回の調査では、図2に示すように竪穴建物跡や溝などが多く見つかりました。図は紙面の都合上分割していますが、調査区は図1のように南北に長く、南側と北側で遺構の分布が異なることが特徴です。

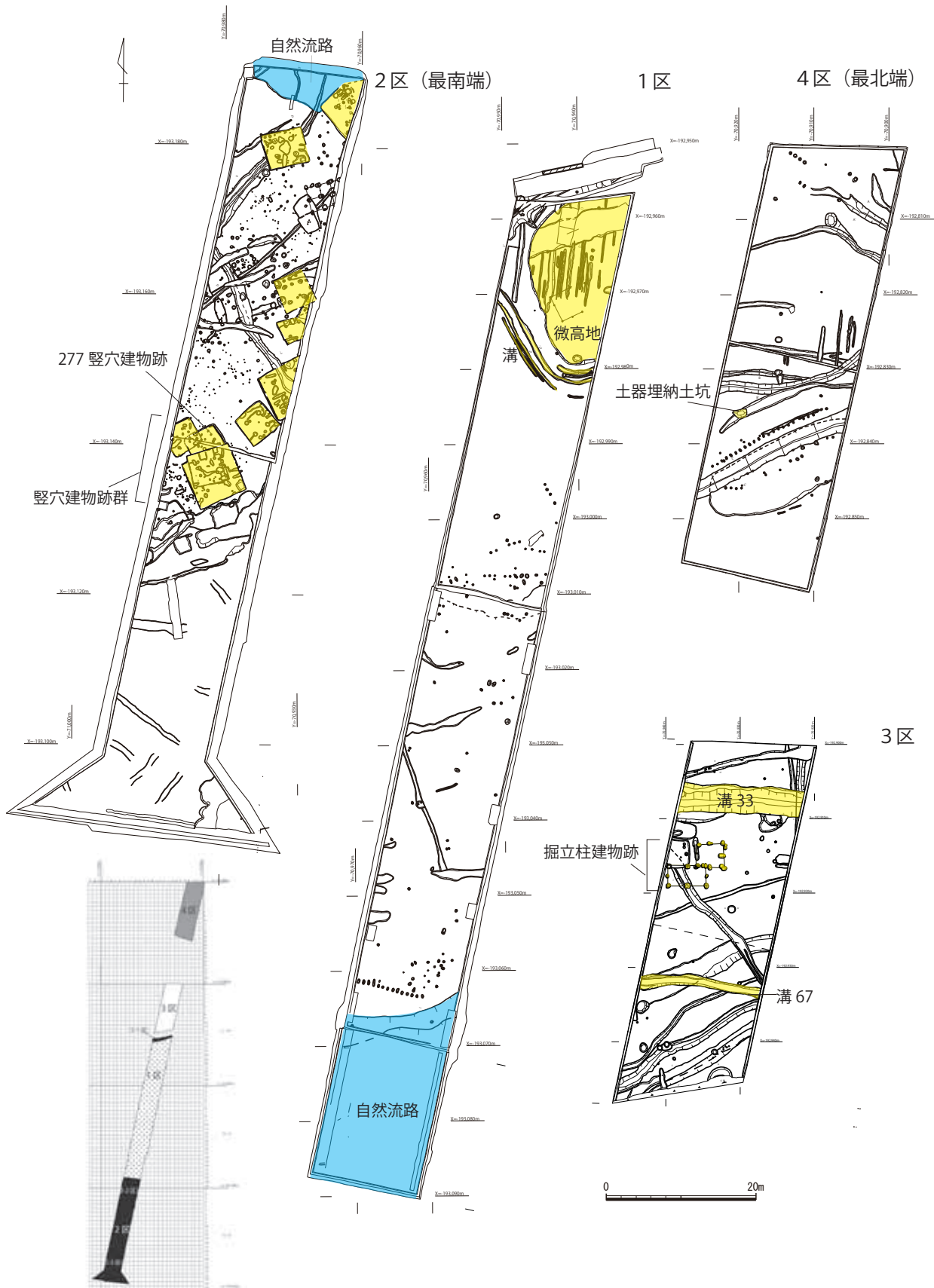


図2 遺構配置図 (文中で紹介している遺構には着色)

古墳時代の竪穴建物跡

調査区の南部(図2左・2区)では、竪穴建物跡が多く見つかりました。見つかった竪穴建物跡は、すべて床の平面が方形であり、その多くが4本柱でした。また、見つかった竪穴建物跡には造り付けカマドをもつものが複数ありましたが、

その多くが東壁にカマドを備えていました。また、炭化した、炭化材を伴った277竪穴建物跡(写真2)が1棟見つかりました。この炭化材は建物の柱や屋根の可能性があり、当時の建物の上部構造を考える手がかりとな

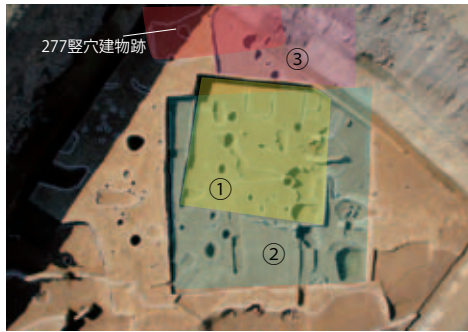


写真1 竪穴建物跡群(上空から・上が北西)新しい順に①～③を付している。



写真2 277 竪穴建物跡(西から)

ります。

今回の調査では、複数の建物跡が重なっていました。中には、4棟もの建物跡が重なって検出されたものもあります(写真1)。建物跡が重なって検出されることは、同じ場所に建て替えを行った可能性があることを示しています。竪穴建物の耐用年数はおよそ20～50年ほどと考えられており、前の建物がなくなり新たな建物が建てられるまで別の場所に移動をしていたとすれば、時期の大きく異なる遺物が発見されますが、今回見つかった建物跡群の場合は、出土遺物に時期差がほとんど見られなかったため、すぐに建て替えたことがわかりました。

自然流路と微高地

調査区南部の竪穴建物跡が見つかった場所の北側には、大きな自然流路が流れていました(図2の青部分)。この流路を境に遺構の時代や種類が大きく変わり、北側では奈良時代以降の溝が複数発見されるもの、南側のように古墳時代の竪穴建物跡は見つかりませんでした。

自然流路のすぐ北側は微高地になっており、微高地上に掘立柱建物跡が検出されました。また、微高地の周りでは地形に沿った溝が複数見つかりました。

自然流路を境に遺構の種類や時代が変わっていることから、この自然流路を境に全く異なる集落が分布していたことがわかりました。

古代の溝群

調査地の北半部では多くの古代の溝が重複しながら見つかりました。確認された溝のほとんどが北東から南西方向に延びているのに対し、遺物を多く含む33溝と67溝は東から西に溝が延びていました(図2右下・3区)。

33溝は、幅約3.5m、深さ約1.5mと、今回の調査において特に規模の大きい遺構です。この溝からは、平らなつまみを持つ蓋や、平底に高台のついた杯などの奈良時代の須恵器・土師器が多く出土しました。出土した遺物には、移動式カマドの破片など、この遺構でしか見つからなかったものもあります。33溝のすぐ南側では掘立柱建物跡が2棟見つかりました。建物跡からは時期のわかる遺物は出土していませんが、建物の軸が33溝とほぼ平行する東西方向であることから、溝と何らかの関係がある施設の可能性がります。周辺の溝との重複関係から、67溝は検出した溝群の中でも時期の新しいことがわかりました。また、67溝からも平底に高台のついた須恵器杯などが見つかり、33溝と近い時期のものであることがわかっています。

古代の土器埋納土坑

調査区の北端部からは、多くの須恵器・土師器が埋納された土坑が見つかりました(図2右上、写真3)。土坑からは鉄鉢を模した須恵器や、暗文を施した土師器の蓋や皿などがあります。これらの遺物から、この土坑は奈良時代〜平安時代のものであると考えられます。



写真3 古代の土器収納土坑(西から)

出土遺物について

今回の調査では、多くの須恵器・土師器が見つかりました。これらは器種や文様などが異なり、

これらの違いが遺物や遺物の出た遺構の時代を決める手がかりとなりま



写真4 出土した須恵器杯

す。

写真4に挙げて

いる土器は、古墳時代の竪穴建物跡(上)と奈良時代の67溝(下)から出土したものです。2つとも須恵器の杯(現在の碗に相当する器)ですが、見た目から特徴が大幅に異なっています。竪穴建物跡から出土した杯は、中央に段状の受部(蓋を重ねるための部位)を有します(写真の○で囲んだ部分)。

一方、67溝から出土した杯は、平らな底に高台(器の底につける輪状の部位)がついているほか、受部が無いことが特徴です。また、写真5は土器埋納土坑から出土した杯の内側ですが、写真の○で囲んだ部分に放射状の模様が薄く見られます。これは暗文といい、古代以降で見られる文様です。

集落の変遷について

今回の調査では、調査区の南半部で東西に延びる大型の自然流路(図2の青色部分)を検出しましたが、この自然流路を境に分布する遺構の種類や時代が大きく異なることが分かりました。自然流路より南では、北東―南



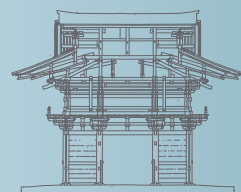
写真5 暗文を伴う土器

西方向を軸にした主に古墳時代の竪穴建物群が建てられていました。一方、自然流路より北からは竪穴建物跡がなく、多くの溝が見つかりました。これらの溝には、自然流路より南側にはなかった古代の溝も含まれ、そのうち特に新しい溝(33溝・67溝)や掘立柱建物は東西方向を軸にしていました。同じような例は、田屋遺跡内でも過去の調査で度々見られます。

田屋遺跡は、小さな集落が年月をかけて移動を繰り返したことで、複数の集落跡が同時に発見されたため、結果的に大きな集落跡のように見えるだけで、大きな一つの集落ではないことが過去の調査により明らかになっており、今回の調査もそれを裏付ける結果となりました。

今回の調査区は田屋遺跡でも調査が少なかった北東部にあたり、この付近の様子が明らかになってきたことは大きな成果です。また、今回見つかった遺構・遺物の一部は田屋遺跡でも比較的新しい古代以降の集落のものであり、この遺跡における集落の移り変わりを考える大きな手掛かりになったといえます。

(森田真由香)



史跡旧名手宿本陣整備事業

名手役所主屋及び離れ・蔵復旧整備

概要

国指定史跡旧名手宿本陣は名手市場の旧大和街道沿いに位置します。敷地は南側に重要文化財指定されている旧名手本陣妹背家住宅主屋、米蔵、南倉が建ち、北側は現在、復旧整備を進めている名手役所の主屋と離れ・蔵が並ぶ屋敷構えになっています。

名手役所の建物は、借家から無住となつてから傷みが進んでいたため、平成九年に那賀町（現・紀の川市）により、復旧を前提に一旦分解され、部材は仮設倉庫に保管されていました。そして、平成二九年度から国庫補助事業として、復旧整備を進めています。

名手役所について

名手役所は、史料では延宝三年（1675）年に存在していたようですが、正徳4年（1714）の火災で類焼し、延享三年（1746）頃に主屋が再建されました。主屋はその後、天保四年（1833）

に増築を伴う変更があったと棟札で明らかになっており、その姿で復旧することになりました。離れ・蔵の建築年代は定かではありませんが、江戸後期頃に建てられたと推定されています。

事業について

整備事業は令和元年度より復旧工事に着手し、離れ・蔵から復旧を行い、令和二年度で組立作業を完了しました。現在は、主屋の復旧作業に取りかかり、木部の繕い補修や組み立てを行っています。

主屋を組み立て始めた時には、倉庫に保管していた再用柱を礎石に立てても、建物のいたるところで、高さが合致せず、調整の必要がありました。

建物が存在していた頃から何が変わっているのか。部材痕跡があるか、存置されている礎石が動いているのかなど、原因と考えられる要因について考察が必要になりました。

手がかりとしたのは、全ての柱下面がほぼ真つ平らな加工面となっていた点です。一般的に、礎石に接するこの面は「ひかりつけ」といって、自然石の表面に合わせて



木工事 施工状況（南東からみる）

柱の下面を削って、ぴったり合うように施します。しかし、そのような痕跡が認められないため、柱を切り縮めた影響を留意し、基準となる高さを決定しました。

その後も保管されていた部材を可能な限り再用し、現在まで順調に木部の組立作業が進行しています。

続いて、左官工事や屋根工事などの事業を実施し、令和五年三月の事業完了を目指します。

（大給友樹）

歴史的な建物は、修理を繰り返すことで守り継がれてきました。オリジナルに忠実に行われた修理も、改変されていることもあります。文化財として修理する際には、より古い状態のほうが建物の価値を高めると判断され、根拠に基づいた復原を行うこともあります。そのような歴史を紐解いていく作業について、ご紹介していきます。

現在修理を進めている紀の川市の藤崎弁天弁天堂（県指定名勝）は、元禄年間に建てられた三間堂ですが、近年の改変で床が合板張りとなっており、下地もすべて取り替えられていました。分解を進めたところ、江戸後期に新設された脇仏壇の下に、巾53cmの楠の床板が残されていることを確認しました。仏壇より手前側は切断されていましたが、切り残しの状況から、2mほどの長さの板を前後に張り継いだ床であることがわかり、復原を進めています。横嵌め板壁にも最大で58cmの楠板が使われており、建物の大きな特徴となっています。

室町時代後期の建物ですが、海南市の福勝寺本堂（重要文化財）にも壁に巾60cmを超える松の板が残ります。外陣の床板の巾は切り縮められています。古材に残る釘痕のピッチから、かつて壁板と同じ幅広の板が張られ、良材を壁に、節の多い板を床に割り振って使用されていたことがわかりました。

よく、文化財になると釘一本打てなくなる、といった話を耳にしますが、釘穴一つが能弁に建物の歴史を語ることもあるのです。（多井忠嗣）



左材巾53cm、右材巾34cm

きのくに歴史小話

～きのくにれきしこぼなし～

突然ですが、パソコンの文章作成ソフトなどで見る「保存のマーク」が何に由来しているかご存知ですか？ また、実際に由来となった物を使っていましたか？

保存のマークの由来になったものはフロッピーディスクといい、USBメモリのような記録媒体です。

20年ほど前までは使われていましたが、今では日常生活で目にすることはほぼありません。かと言って、フロッピーディスクに代わるマークは今なお定着していません。

このように、本来の役割を失い形だけを残したものを考古学では「ルジメント」と言います。考古学においてルジメントは、物の時代（新旧）を判断する手がかりの一つです。代表的な例の一つに、提瓶の肩のパーツがあります。本来この箇所は紐を通す輪でしたが、新しくなるにつれて紐をつけられないフック状のもの（写真1）になり、果ては一見何のためにしているかわからないボタン状のもの（写真2）になります。身の回りのもので「なぜあるのかわからないパーツ」があれば、進化の過程で変わっていったルジメントかもしれません。

（森田真由香）



写真2



写真1

催し物案内 和歌山県内の文化財関係イベント情報 (2021年冬～2022年春)

和歌山県立紀伊風土記の丘

- 冬期企画展「紀北の古墳群～その実像に迫る～」
2022年1月15日(土)～2022年2月27日(日)
- 春期企画展「古代『紀伊国』の成り立ち～奈良・平安時代のわかやま～」
2022年3月19日(土・祝)～2022年5月8日(日)

和歌山県立博物館

- 特別展「和歌山と皇室―宮内庁三の丸尚蔵館名品展―」
2021年12月4日(土)～2022年1月23日(日)
- 企画展「仏像は地域とともに―みんなで守る文化財―」
2022年1月29日(土)～2022年3月6日(日)

和歌山市立博物館

- 企画展「歴史を語る道具たち」
2022年1月12日(水)～2022年2月27日(日)

高野山霊宝館

- 令和3年度平常展「密教の美術」
2021年12月4日(土)～2022年4月10日(日)

※新型コロナウイルス感染拡大防止のため、期間変更や中止となる可能性があります。
掲載内容は変更される可能性があります。詳細は各施設へお問い合わせください。

目次

- 1 表紙「調査地を北からのぞむ」
- 2 特集「田屋遺跡の発掘調査 ～場を変え長く続いた集落～」
- 6 文化建造物課 短信「史跡旧名手宿本陣整備事業 名手役所主屋及び離れ・蔵復旧整備」
- 7 きのくに歴史小話「藤崎弁天弁天堂一床の復原―」
「ルジメント」
- 8 催し物案内

風車97 (2021・冬号)

令和4年1月31日

(公財)和歌山県文化財センター

URL <http://www.wabunse.or.jp/>

(公財)和歌山県文化財センター

【事務局】〒640-8301 和歌山市岩橋1263番地の1
TEL 073-472-3710 FAX 073-474-2270
kanri-2@wabunse.or.jp

LINE 公式アカウント
ID: @942tjyhk

